



太陽の塔（本文中に関連記事があります）



目次 / contents

特集「昭和の風景を訪ねて」.....

昭和な酒場に GO！ / ニュースレター編集委員 ②

1970年 万国博覧会・21世紀の設計&アルパック
/ 三輪泰司 ⑥

ひと・まち・地域.....

茨木市北部エリアガイドブック「いばきた」を作成
しました！ / 岡崎まり・片野直子 ⑬

動き出した、ミナミ御堂筋沿道のまちづくり
/ 絹原一寛 ⑭

新人紹介.....

伊藤栄俊・片山麻衣・戸田幸典・塗師木伸介・樋口彩子 ⑮

きんきょう.....

下北山村写真集「きんきょうの郷の暮らしから」が発行さ
れました / 鮎子田稔理 ⑱

暗闇の中の対話（ダイアログ・イン・ザ・ダーク）を
体験してきました / 大河内雅司 ⑲

まちかど.....

昭和町界隈でどっぷり昭和を満喫！ / 中井翔太 ⑳



特集「昭和の風景を訪ねて」

昭和な酒場に GO !

特集

ニュースレター編集委員

平成 27 年の今年は昭和でいえば 90 年。「昭和な」という形容詞がいつごろから使われるようになったのかは定かではありませんが、「レトロで懐かしい」といった肯定的な意味で使われることも多いのではないのでしょうか。ちなみに「昭和」という場合と「昭和な」ではイメージが微妙に違うようです。web の画像検索をしてみてください。

さて、本号では「昭和の風景」を特集でお届けします。前半はいまや風前の灯ともなりつつある「昭和な酒場」、後半は「昭和」の高度経済成長期のエポックで創世記のアルパックとも関わりの深い大阪万博です。どうぞお楽しみください。



鶴橋編「よあけ食堂・海の家」

J R と近鉄が交差する鶴橋駅の周辺には夕刻ともなると焼き肉の匂いが立ちこめ、駅のホームにまで充満しています。

今ではすっかり鶴橋＝焼き肉のイメージが定着していますが、実は鶴橋商店街の中で焼き肉店というのはほんの一部で、昭和 50 年代以降に増え始めた鶴橋商店街の歴史では比較的新しいと言えます。

鶴橋の成り立ち

古来より難波～大和を結ぶ交通の要衝であった鶴橋に大正時代に近鉄電車鶴橋駅が整備され、昭和 7 年に国鉄城東線、今の大阪環状線が電化高架されて現在の鶴橋駅が開業しました。その頃は商店もちら

ほらあったものの、長屋住宅や小さな町工場が点在する比較的のどかな地域であったということです。

第二次世界大戦が末期を向かえた頃、空襲による延焼の被害を軽減するために強制的に建物を取り壊す建物疎開が行われました。鶴橋周辺でも昭和 19 年 12 月から昭和 20 年 6 月までに計 4 回の建物疎開が行われました。突然自分の住居や生活の糧を失われるというあまりにも理不尽なことが戦時中には、当然のように行われていたのです。

この建物疎開によって、鶴橋駅周辺には広大な公共の空き地が広がることになり、また、空襲による壊滅的な被害を免れていたため、戦争直後の未曾有の困難な時代を生き抜くために、人々はここで闇市を営み、あるいは食料や日用品を求めて買い出しに押し寄せたのです。それが現在の鶴橋商店街の発祥であり、細い路地や入り組んだカギ型の路地で構成されているのは、建物疎開のときの区割りの名残と考えられます。鶴橋商店街の東側を走る道路「矢田豊里線」は通称「疎開道路」と呼ばれています。

鶴橋に行けばなんでも揃う

現在の鶴橋商店街は天王寺区、生野区、東成区の 3 つの区にまたがって 6 つの商店街で構成されており、商店街に属さない店舗も含めると約 800 店舗が営業しています。

キムチやチヂミなどの韓国食材を扱う店の他、服飾、鮮魚、乾物、飲食など業種は多岐にわたり、「鶴橋に行けばなんでも揃う」と言われていました。各店舗が小さいため、家具屋だけはないと言われていたようです。



何でも揃う商店街



木造アーケード



よあけ食堂

お客さんも一般客だけではなく卸売市場エリアにはプロの料理人たちも早朝から買い付けに訪れます。最近では、マップとカメラを持って鶴橋まち歩きを楽しむグループの姿も見受けられ、1日中多種多様な人々が集うまちとなっています。

木造アーケード

昭和30年代、全国的にも商店街にアーケードがつけられていきましたが、鶴橋でも昭和30年頃からアーケードが設置され、今でも当時のアーケードが使われています。なかでも中央会に設置されているのは木造のアーケードで、柱を建てるのではなく、建物から梁を突き出すようにして造られています。現存する日本最古の木造アーケードと言われています。

【よあけ食堂】

鶴橋で働く人や訪れた人のために早朝から深夜まで営業していた飲食店も多くありました。その中のひとつ「よあけ食堂」を訪ねてみました。現在は朝10時～22時までの営業ですが、遅い朝ご飯、昼食、夕食や一杯飲みにくる人のために、ご飯物からお酒のあてまでたくさんのメニューがあり、決して広くはない厨房で手際よく調理されて、熱々の料理が次々とできます。イワシ汁うどんは小ぶりのイワシやニンニクや青唐辛子が入っていてうどんを食べ終わった後は、残った出汁でつくった雑炊を食べることもできます。

【海の家 紀伊国屋】

JR鶴橋駅前から離れるように商店街をすすると奥へ進んでいったところに「海の家」というBARがあります。サーファーのマスターがオリオンビールなど南国のお酒などをそろえています。10人も入れれば満席の鶴橋らし



海の家

い心地よいサイズのお店で、気候の良い夜は店の前のテーブルで飲むことも可能です。ここは元々、マスターのお父さんが乾物屋さんをやっていた所で、そこを手作りで改装して今のお店にしたそうです。お店の前には乾物屋時代の看板が残されています。

みんなの思い出を受け継ぎながら小さなスケールで変化していく素敵なまち、鶴橋を見た気がします。(鮎子田稔理・塗師木伸介)

◆よあけ食堂

大阪市東成区東小橋 3-17-22

◆海の家

大阪市生野区鶴橋 2-3-13



梅田編「松葉」

この4月にオープンしたばかりのルクアイーレやグランフロント大阪など最新の商業施設が建ち並ぶJR大阪駅の地上階から階段を下りると、そこにはディープな昭和の風景があります。ある意味大阪の象徴のような立ち呑み串カツの店「松葉」です。

串カツは人気の牛串1本100円から若どり1本160円など約15種類。注文して熱々揚げたてを食べるのが一番ですが、冷えてきたものは再度温め直してもらうこともできます。当然のことながらソースの二度づけは禁止。串を持つ手が油でべとべとになったら目の前に吊ってある濡れ布巾で手をふきます。最後に串の数（値段によって串の種類が違う）を数えてお勘定。ビールも飲んでお腹も満足して1人千円から2千円くらい。

混雑時には体を斜めにしないと入れないので昭和を代表するコーラスグループの名前からダークダックス・スタイルとも呼ばれました。

終戦直後から営業を続けてきたこの名物店が大阪市の地下道拡幅に伴い立ち退きを求められ、移転先の目処が立たないまま消えようとしています。（新梅田食堂街の本店は営業を続けます）

松葉がある「大阪駅前地下道」には終戦直後の混



乱期には闇市が建ち並び路上生活者の寝床になっていました。闇市の解消や衛生面の観点から大阪市は飲食業者に「道路占用許可」を与え、以来毎年占用許可を更新しながら営業を続けて来ましたが、地下道の拡幅工事に伴い大阪市は平成26年10月以降の占用許可を打ち切られました。

4月中旬の時点で他のお店の多くは既に立ち退き、仮囲いで覆われていますが松葉は営業を続けており、次から次へとお客さんがのれんをくぐります。

この号が発行される頃にはもしかするとなくなっているかもしれません。事態を見守るしかありませんが、当たり前のようにあったまちかどの風景が変われるのは寂しい限りです。（鮎子田稔理）

◆松葉地下店 大阪市北区梅田3大阪駅前地下街4号



京都編「リド飲食街」

ドラマ「孤独のグルメ」を見てるとグルメだけでなく昭和のいい感じの風景に出会います。最近ではドラマ「ワカコ酒」にはまり、その影響でお酒を嗜むようになりました。「ワカコ酒」とはグルメ漫画がドラマ化された作品で、仕事を終えた女子が一人酒場をさすらい美味しい肴で一杯やるという、いわば「孤独のグルメ」女性版です。聖地巡礼に行きたいのですが、なにぶん東京系ドラマなんで、なかなか行く機会がありません。なのでつばら近場の居酒屋街を訪れています。

さて、京都にも昭和の雰囲気が残るレトロな居酒屋街がいくつかあります。その一つ「リド飲食街」をご紹介します。

ここは京都の烏丸七条のほど近くに立地し、60年前からあるとのこと。狭い通路の両側に無国籍料理、ワインバー、ホルモン焼き、和食小料理、串カツなどカウンター席の居酒屋が10店舗、肩を寄せ合うように並んでいます。通路を何度も行き来し、どこに入ろうかかなり悩みます。ぼんやり灯る入り口の看板、入るのに勇気があるタイル張りの共同トイレ、年季の入ったガラスの引き戸をがらりとあけて入るのも風情があります。どこも店主が一人忙しく切り盛りされていて、カウンター越しに会話も弾みます。最近、開店されたお店もありますが、一番古いお店は、母子二代で55年前から営業されているそうです。客層は常連だけでなく京都駅から徒歩圏内なので観光客も多いようで、入り口の人気店はいつも満席状態です。気になる価格はどれもリーズナブルで、はしご酒も可能です。

私のこの周辺の一番古い記憶は、子どもの頃、母に丸物百貨店（現在はヨドバシカメラになっています）の屋上遊園地につれていってもらい観覧車に乗ったことです。平成になると京都駅ビルを

はじめホテルやデパート、家電量販店などの建設が進み、その変貌ぶりは目を見張るものがありました。開発から取り残されるような形で存在しているリドの空間は、バージニア・リー・バートンの「ちいさいおうち」を連想させます。この通路に一度足を踏み入れると、ゆったりした時間の流れを感じる独特の雰囲気が漂っています。昭和の世界にタイムスリップできるという時間旅行が楽しめるこの空間は、まさに昭和の遺産といえます。京都タワーと共に変わりゆくまちの姿を眺めてきたリド飲食街。これからも時代の流れに流されず、ずっと残って欲しいと思います。

ちなみに京都にはこの他に「四富会館」、「折鶴会館」など昭和の世界にひとつ飛びできる居酒屋街ゾーンがあります。今週末も仕事帰りに「ぶしゅー※」しに行こうと思います。（中村孝子）

※美味しいお酒を飲んだあとにでるワカコの決め台詞

◆リド飲食街

京都市下京区七条通烏丸西入ル東境町 180



開業 50 周年を迎えた京都タワーとリド飲食街



何度も行き来してしまう通路



裏側の入り口



特集「昭和の風景を訪ねて」

1970年万国博覧会・21世紀の設計&アルパック

特集

名誉会長／三輪泰司

去る4月17日、京都市保育園連盟・八瀬野外保育センターの運営委員会に続いて恒例の観桜会。センター設立は、1970年5月。日本万国博覧会の年です。45年の年月が経ちました。世代交替が進み、すっかり若返った委員の皆さんに、一席のスピーチの機会を頂きました。

アルパックは、2年後、創業50年になります。「1970年」を軸に、次の世代へ伝えるべき歴史のダイジェストの、そのまたエッセンスを記しておきたいと思います。

疾風怒濤の時代

「日本万国博覧会」については、公式記録があり、会場計画の技術的諸問題についてもまとめています。（註：「建築と社会」66年8月号）

京大グループ（代表・西山卯三）が、万国博覧会協会から受託した会場計画の基礎調査を始めたのは、1965年11月17日です。その日、西山夫妻の銀婚を祝って、ご夫妻の媒酌で結婚した18家族が、南禅寺の何有荘で園遊会を催しました。前年9月11日、オランダで客死した絹谷祐規助教授を偲び、建設省から戻り、代わって着任した、上田篤助教授を迎えて、悲しみを超え、新たな団結と前進を誓う集まりでした。続いて近くの湖月荘でグループ結成会議が開かれました。

アジアで初めての公式の国際博覧会です。テーマ



万国博・計画チームのマーク（久谷政樹）



万国博・マスタープラン第2次案

となる基本理念「人類の進歩と調和」は決まっていたのですが、会場計画に関して判っているのは、「1970年に、北大阪・千里丘陵で、万国博覧会を開く」、の3つだけでした。

そもそも「万博とは何か」から始めて、年末年初を挟み3ヶ月で、ベースマップと膨大な報告書を仕上げ、66年1月20日に提出しました。それからマスタープラン・基本設計・実施設計、造成工事、パビリオン建設、展示、そして1970年3月14日開会へと、日本人は僅か5年でやり遂げてしまいました。

基礎調査を終えて、私たちは、マスタープランに取り掛かりました。まだ、プランニング・コンサルタントなる職能組織がない時代です。大阪・東京の建築事務所からピックアップ・チームを編成し、御堂ビルのワンフロアーに臨時事務所を開いたのは66年2月。連日の徹夜作業。私は西山先



用地取得前の会場予定地（白線内が万国博会場となった）
写真出典：日本万国博覧会と大阪市



万国博・第2次案全体模型

生をチーフとするコアスタッフ会議での調整・決定を受けて、テーマを表現する“お祭広場・環境リサイクル”などを具体化して、土地利用・交通動線から造成計画へ実現する作業チームの指揮を受け持ちました。5月23日、全体とモデル地区の模型から工費積算まで仕上げ、会場計画委員会の承認を受け、「前半西山・後半丹下」と言われていましたように、第2次案をもって丹下グループへ引き継ぎ、6月11日、西山グループは引揚げました。“Sturm und Drang” 疾風怒涛とはこのことかなと思いました。

開発ブームと影

1945年敗戦。「国敗れて山河あり」とはこのような姿かと思ひ知らされました。15年におよぶ戦争の果て、この国の暮らしと人の心は荒廃しきっていました。

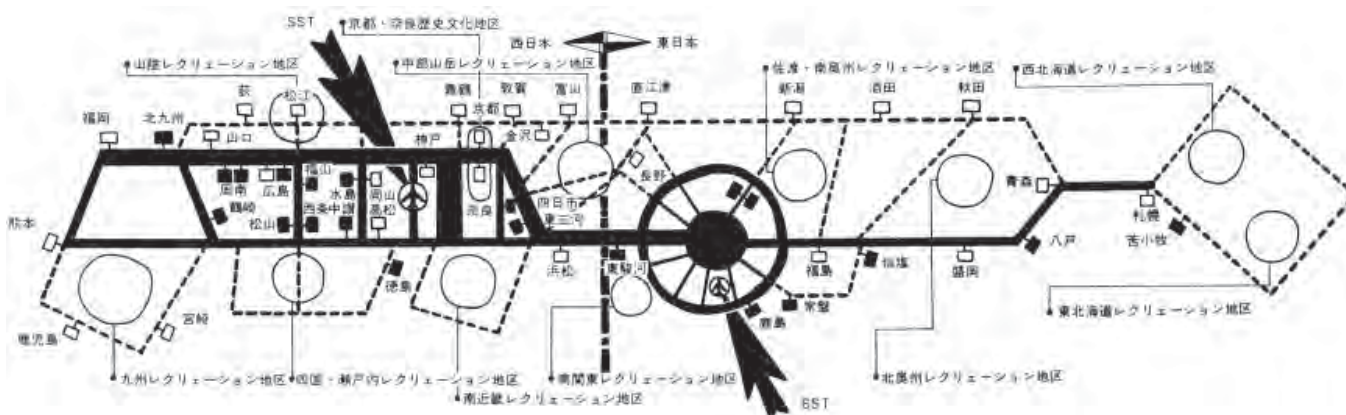
それから20年。目覚しい戦後復興を、日本人の勤勉さにありとするのは間違いではありませんが、忘れてならないのは朝鮮戦争です。第1次世界大戦

の主戦場はヨーロッパで、始め日本は輸出入の途絶に見舞われましたが、直ぐに戦争景気に湧き、重化学工業が大成長。その影で物価高騰、低賃金で米騒動や労働争議が頻発。労働力が工業へ吸い上げられた農村は疲弊し、劣悪な労働条件が、庶民層の意識高揚を引き起こし。普通選挙法と治安維持法の抱き合わせ制定。大正という時代の光と影です。

歴史は北東アジアで繰り返されました。1950年6月、極く近くで始まった朝鮮戦争による特需景気と冷戦体制強化、対して新たな意識高揚です。

今度は重化学工業の間で矛盾が激化しました。引き金はエネルギー転換と公害。60年早々には、三井三池炭鉱の全山無期限スト。日米安保条約改定を巡る民主主義運動の高揚。東京山谷に続いて61年8月、大阪釜ヶ崎で大暴動。64年、東海道新幹線開業、東京オリンピックの一方で、四日市公害訴訟。アメリカでは、前年のワシントン大行進の結果、64年7月、公民権法制定。その一方で、ベトナム戦争は泥沼化し、65年2月、北爆開始。インドシナ半島諸国では万国博どころではありませんでした。

1960年12月の「所得倍増計画」は、戦後復興からの脱却宣言のようですし、確かに万国博は、この国が高度経済成長を達成するスプリング・ボードの役割を果たしましたが、世界と日本はどのような時代相の中にあっただかを理解しておくべきでしょう。





21 世紀の設計と万国博

1967 年 12 月、政府が「明治百年記念事業」として「21 世紀の日本に関する国土と国民生活の未来像の設計」の公募を発表しました。いわゆる“21 世紀の設計”です。応募資格は各関係分野の専門家によって構成されるグループで、応募希望のグループは、翌 68 年 2 月 15 日までに応募申請に所定の附属書類を添えて内閣官房内閣審議室へ提出し、資格審査を受けることになっていました。

3 月 15 日、審査をパスした「関西グループ」の編制は、西山卯三教授を責任者とし、総括班 12 名、計画設計班 12 名、調査研究班 51 チーム 207 名。3 月 20 日、受託機関として株式会社地域計画建築研究所は、内閣審議室と契約を結びました。「21 世紀の設計」は、3 ケ年継続事業で、1970 年 10 月 31 日、報告書提出。翌 71 年 3 月 1 日、審査結果が発表されました。4 月 23 日、首相官邸で表彰式が開かれ、完了しました。

募集要項にありますように、中間的な計画設計を 68 年 9 月末までに提出し“その全部又は一部が日本万国博覧会の政府館に展示される”ことになって



いました。万国博の会期は、70 年 3 月 14 日から 9 月 13 日までですから、完成した報告書提出の時点では、もう終わっているからです。報告書の著作権は応募者にありましたので、関西グループは、図版等の体裁を整えて、1972 年 12 月 25 日、勁草書房から「21 世紀の設計」全 4 巻として出版しました。

万博・21 世紀の設計とアルパック

時系列で見ますと「アトリエ・アルパック」の設立は 1967 年 2 月 3 日。法人設立登記は、67 年 8 月 18 日ですから、内閣審議室との契約には間に合っています。「21 世紀の設計」関西グループで、私は総括班幹事ですから、代表して首相官邸での佐藤栄作首相主宰の表彰式に参列し、保利官房長官から賞状を受けた次第です。

もう一つ、私は計画設計班の一員でした。計画設計班は、国民生活・国土・高密集積及び低密地域の 4 チームから成り、私と霜田稔は低密地域、浅田恵弘は高密集積地域を担当していました。

もう一度、時系列で見ますと、1970 年 10 月の「21 世紀の設計」報告完成の時期は、アルパックが創業としている 1967 年 2 月 3 日から既に 3 年半経ています。その間、何をしていたのでしょうか。

企業経営のベース

「21 世紀の設計」低密地域の計画設計の作業と併行して、一つは、創業間もない 1967 年 6 月 28 日、冒頭の八瀬野外保育センターへ発展する京都市保育



日本万国博覧会（写真出典：日本万国博覧会と大阪市）

図-6 農業地域の自治生活圏の設計(津山圏)



21世紀の設計・農業地域・津山圏の設計

研究集会での保育事業提案をしています。これは翌68年3月、京都市保育事業団設立。70年8月、八瀬野外保育センター発足と進み、11月には「自然とのふれあい」をテーマに、既存の小屋を改装して、ささやかな第1期「ひいらぎの家」が完成しました。

もう一つは、隠岐の島の計画を始めています。「西郷町総合計画」は69年3月に終わりましたが、当時、町企画課長であった岡崎晃道さんはお寺さんで、退職後、自坊へ戻り住職を勤めておられました。私はその後、隠岐へ行ったことはありませんが、ずっと岡崎さんと文通を続け、本山へ来られた度に、京都でお会いして「隠岐」を語っていました。

何故、このようなボランティアのような仕事をしたのでしょうか。またその一方で、どうして創業4年目の1970年には、年平均13.17人のスタッフで年収4500万円、5年目の1971年には、17.92人で1億円を超える企業経営体になっていたのでしょうか。

西山先生と研究室の支援と継承です。まず、龍谷大学深草学舎の計画は、まだ“アトリエ”がなくて現場事務所で始めました。当時、西武化学工業と言っていた西洋環境開発(株)の洛西桂坂プロジェクトは、西山先生と同期の学術会議議員で、退職後同社の顧問格であった奥田東・元京大総長が、堤清

二さんに推して下さった仕事です。

創業したばかりの11月3日には、西山先生設計の徳島県郷土文化会館の設計を受託し、小さな“アトリエ”で、全員総がかりで、設計から積算まで、完成し、現場監理業務まで進めています。

研究室から継承したのは、当時上田篤助教授担当の京都市久我・羽束師工業団地、絹谷祐規助教授担当の清水焼団地、三村浩史助教授担当の、後のファッション産業団地となる繊維産業団地があります。

その他に万国博の警備・消防本部の設計も受けましたが、これらの仕事で培った技術と知見、そして人脈をベースに、オリジナルに開拓した仕事もあります。

一つは、琵琶湖東部から北伊勢、播磨内陸へと続く市町村総合計画と広域計画で、67年12月の城崎温泉総合都市計画基本計画は、町民大会までもって、のちのちまでのまちづくり基本理念が打ち立て

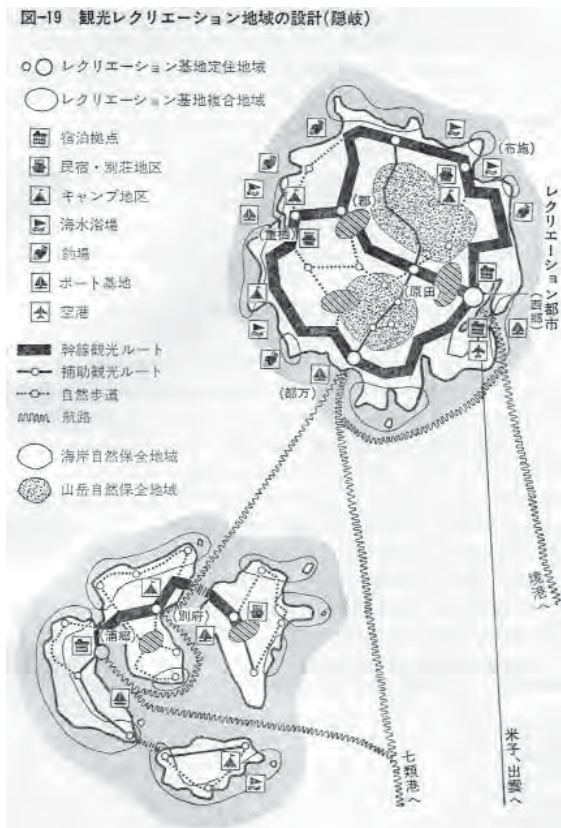
図-2 自活生活圏と圏域中心都市



21世紀の設計・低密地域の自治生活圏ネットワーク



特集



21世紀の設計・隠岐の設計

られました。二つ目は、国鉄吹田駅前に始まる市街地再開発事業の計画と設計です。合意形成を図る上でも応用できる「都市計画」が我々の基幹技術であることを認識しました。

こうして計画・設計業務によって財政基盤を作り、子どもたちのため、離島や過疎地の暮らしのため、直ぐにはお金にならない奉仕に熱中したのです。それがアルパックのミッションであり、ただ食べて行くためだけであつたら、アルパックなど作る必要はないと考えていたのです。仕事に熟達してくれば、素早くポイントを押さえ、効率がよくなります。

隠岐では、島根県の農業試験場で、隠岐には「明治初年、牛馬一万」という記録を発見して“牛突き”の習俗が分り、京北で見た「混牧林」を事例にあげ、農協と森林組合を結んで牛飼いを提案しました。また、墓石の戒名から、ここは政治犯の流刑地であつたこと、文物が残っていることを確かめ、役場の女

子職員に民謡発掘運動を起こしてもらい、“誇り持とう”と社会科の副読本「立ち上がる隠岐」が作られました。調査や研究で、ウロウロしているようですが、当面の業務に使えなくても、次の仕事に役立ちます。「直接経費20%」でも不当利得ではないのです。前の仕事で「間接経費」にしていた“ウロウロ”して得た知見獲得の費用を投入しているのです。

ぐるぐる回せ、です。一般的に言う“金は天下の廻りもの”です。だから、やみくもに奉仕活動をやっていたわけではありません。何か意味があるか見極めています。それ故に、それがまた発展・展開して行くのです。

低密地域・過疎地域

隠岐の計画もその一つです。万博という陽の当たる場づくりをやってきて、隠岐を選んだのもワ



21世紀の設計・隠岐のイメージ

ケがあります。

「21世紀の設計」の低密地域に選んだのは、日本海・瀬戸内海・太平洋、3つの海域と、隠岐諸島・中国山地・四国、3つの陸域を横断する日本列島でもユニークな地域です。そのために、計画や設計の間を盗んで、これらの地域を歩き回り、調べ回りました。前任事務所での、日立金属冶金研究所の計画で、島根県安来市に3ヶ月滞在して、中国山地や隠岐諸島の土地勘も得ていました。

その後、74年の国土庁と3府県のマルチ・クライアント方式の「近畿日本海地域計画」や、77年の建設省から通産省まで繋がる「海洋スペース利用計画研究」では、3つの海域研究で学んだ、沿岸域の環境・生態や、海図の読み方までが役立ちました。

これだけではまだ「芯」がありません。実は「21世紀の設計」を貫き、万国博で展示して見せた、設計思想があります。「自治生活圏構想」です。

国土構想の研究

万博会場計画の基礎調査開始は、1965年11月と言いましたが、その年の5月、研究室のチームは、東一条のしま旅館で合宿し、国土構想の研究を始めました。成果は基礎調査報告を出した後、「新建築」誌の4月号に「国土における生活空間の構想」と題して発表しました。その根幹が「自治生活圏」の思想で、「21世紀の設計」の設計思想の根幹でもあります。

10世紀の延喜式では、この国は66国と2つの島で構成され、さらに300余の“郡”から成っていました。郡の境は河川の流域を基本に、大きさはほぼ20キロ圏。人間が歩いて往復一日の距離です。「自治生活圏構想」とは、住民による地域自治を基本に、人口と機能によるタイプでもって、都市部・農村部、全国に渡って構成するという考えです。

下って、1997年10月アルパックは、京都市主催

<年表>

- 1965・昭和40年：万国博基礎調査・会場計画（出向）
- 1966・昭和41年：6月万国博会場計画第2次案完成
- 1967・昭和42年：2月アトリエ・アルパック開設
8月株式会社地域計画建築研究所設立
- 1968・昭和43年：3月21世紀の設計受託
- 1969・昭和44年：隠岐・西郷町総合計画策定
- 1970・昭和45年：3月日本万博覧会開催
：3月徳島県郷土文化会館基本設計
：5月八瀬野外保育センター設立
：10月21世紀の設計報告書提出
- 1971・昭和46年：4月内閣総理大臣特別賞授賞式
- 1972・昭和47年：12月21世紀の設計出版（勁草書房）
- 1974・昭和49年：3月近畿日本海地域総合開発調査
- 1977・昭和52年：3月海洋スペース利用計画手法に関する研究
- 1997・平成9年：国際コンペ「世界からの提案・京都の未来
自治生活環境圏都市・京都」応募・審査通過

の国際コンペ「世界からの提案・京都の未来」に「環境圏」の概念を加えて「自治生活環境圏都市・京都」を応募し、審査に通っています。交通・通信の手段は変化しますが、人類の生物学的進化は万年単位です。人間が二足歩行によって体験的に認識でき、地域自治が保てる人口規模を基本として地域計画を構想する方法は、千年単位の未来へ通用する計画原理といえるでしょう。個人、チーム、或いは全社が、執拗に追及する理念と方法を持っていきたいです。

人材の構成と継承

1966年12月26日の日誌に「西山先生と万博計画とアルパック経営について協議・西山宅」とあります。6月11日に会場計画第2次案を完成して、西山グループは引揚げました。7月1日には名称を決め、9月17日、創立メンバーの浅田・霜田・三輪に、研究室を代表して上田篤助教授が参加し、正式に創立を決定しました。「進々堂会議」です。名称・略称・シンボルカラー・ロゴ・事務所設営・オープニング日程を決定。かくて、67年2月3日・節



分の日に「創立」となったのです。

西山先生との協議は、第一、丹下先生の指揮下で、お祭広場等の作業に残るメンバーを確認すること、第二、正式の公募発表は1年後ですが政府の明治百年記念事業の情報をキャッチしており、受託機関として、アルパックの法人化を準備すること。第三、アルパックの経営のあり方でした。

アルパックの経営とは、要するに“人間と資金”です。創立コアスタッフは、その前から研究を重ねていました。結果としてお分かりのように、生まれ育ちはまちまちで、ヒトクセある連中ですが、何かしらの繋がりを持っていて理念を共有し、すべて外の世界を見て“異文化体験”を持っています。

そのために、以後の人事政策は、①京大ましてや建築に偏らない。②社会科学系・自然科学系にこだわらない。③外国人・女性を積極的に登用する。となったはずですが。実際には？ですが。

揺籃期の事務所は地の利から、京大に近いこと、貸ビルではなく、小さくとも自前の「資産」とすることにしました。企業経営体であって、仕事の領域はマルチプル、人間はワールドワイド。このようなややこしい組織を運営するには、どうしたらよいか。学者で研究者であって、町工場の生まれで、職人気質に徹して経営では失敗したお父さんを見て育ち、没後に弟子たちが出版した小説「安治川物語」を書かれた西山先生ならではの伝承を受けて幸せでした。

協議を終えて、西山ファミリーの1日遅れのクリスマス会に加わっていました。

自然の法則と、地縁・血縁から始まる人類社会の潮流に逆らってはうまくゆきません。アルパックが創業以来、家族ぐるみで、故郷に根差してきた精神は伝えていきたいです。

今回は、1970年、万国博45年の周年を記念して、ほんのエッセンスでしたが、伝承を試みました。次は、何を記念しましょう。

今年、京都ロータリークラブ創立90周年、そして京都東ロータリークラブ創立60周年です。平澤

興・奥田東・河野卓男という西山外三とも縁の深い先達の伝承を語らねばならないでしょう。

ロータリーの究極の目的は「世界理解と平和」です。ユネスコの構成団体でもあります。グローバルな展開を語らねばならないでしょう。勿論、アルパック50周年へホップ・ステップですので、経営政策の“深化”が中心に据えられるでしょう。

先達から学んだこの種の職能集団を運営して行くために、そのリーダーが、絶対に守らねばならない原理・原則を、実践で深化させてきました。

第一に、明確な概念規定。自らの業種・業態の特徴を認識し、性格規定を繰り返して確認する事。第二に、代表者の責任。代表権者でなければできない責務を果たすことで求心力を獲得し、先頭に立ち、最も窮している者を助けること。第三に、会計に通じること。常に自らの財務解析を怠らず、着実に自己資産を充実すること。そして資金の調達に責任を持つこと。

1967年5月、モントリオール万国博覧会へ行きました。会場計画を終えてから、本物を見るとは、おかしな話ですが。

ニューヨークからワシントンD.C.へ回りました。バージニア州のアーリントン国立墓地でJ.F.ケネディの墓に詣でました。周りを見ると、あちらこちらで、儀杖兵が星条旗を掛けた棺に敬礼して埋葬していました。この国は戦争をしているのだと実感しました。母親たちの悲しみがありませんでした。



首相官邸で保利官房長官から賞状を受ける（写真右が三輪）



ひと・まち・地域

茨木市北部エリアガイドブック

「いばきた」を作成しました！

地域再生デザイングループ／岡崎まり
地域産業イノベーショングループ／片野直子

市の中心部から車で30分、茨木市北部地域（通称いばきた）は、標高400mあまりの山間部にのどかな田園風景が広がり、車から降りると空気の冷涼さに驚きを覚えます。

周辺では新名神高速道路建設（平成28年度末開通予定）と、安威川ダム周辺整備（平成33年度末完了予定）という2大プロジェクトが進んでおり、これに関わってアルパックでも以前から「隠れキリシタンの里」として知られる、千提寺地区のまちづくりに伴走してきました（ニュースレター181号参照）。平成26年度は、ダム湖展望広場などの集客施設構想検討業務を受託し、業務の一環として、地域の魅力発信のためのガイドブックを作成しました。

現況として、いばきたには貴重なキリシタン遺物を今に伝える「キリシタン遺物史料館」や、開店前から行列ができる人気の直売所「見山の郷」、木工・炭焼き体験やBBQができる「里山センター」、隠れ家的農家レストランなどの観光スポットが点在しています。

しかし今まで、これらの点を結ぶ情報発信媒体が皆無であり、1つのエリアとしての一体感はありませんでした。そこでまだまだ認知度の低いいばきたの「お宝」を、地元住民や市民、茨木市役所職員にもっと知ってもらうために、地域を紹介する小冊子を作成することになりました。

デザイン担当のバードデザインハウスと打合せを重ね、「茨木市内に居住・通勤する人が、ホッと癒しを求める旅に出る」イメージで掲載内容を検討しました。1月には地域内の施設や飲食店への取材を実施し、ビジネスを脇に置いた歓待を受け、寒風吹きすさぶ一日ではありましたが、温かなおもてなしと地域への愛着をたっぷり感じる事ができました。紙面には、なるべく取材に応じてくださった職員の方やお店の方の写真を用い、地元の人が登場することで「ほっこり感」と「この地域ならではのストーリー」を感じてもらえるようになっています。

本業務は北部地域にフォーカスしたのですが、茨木市は平成27度から全市をあげたシティ・プロモーションに向けた取り組みを始めています。すで



いばきたパナー



表紙

見山の郷名物のジェラートを取材

に新聞やミニコミ誌に取り上げられる等、「いばきた」への注目度が上昇しており、今後さらに本ガイドブックがエリアの魅力を広め、茨木市の強みの一つとして打ち出すためのツールとなれば良いと考えています。冊子は掲載店舗や市内役所等で配布しているほか、市のホームページからもダウンロードできますので、多くの方にご利用頂ければと思います。

最後にガイドブックの楽しみ方についても一言。実はこのガイドブック、読者にいばきたを身近に感じてもらえるよう、2人の登場人物と共に巡るバス旅仕立ての誌面構成になっています。手に取った際は、2人と一緒にいばきたの旅を楽しんでください。

（いばきた冊子 URL はこちら → <http://www.city.ibaraki.osaka.jp/kikou/toshiseibi/hokubuseibi/menu/hokubumiryoku/hokubutiikinomiryoku.html>）



冊子の中身



ひと・まち・地域

動き出した、ミナミ御堂筋沿道のまちづくり

都市・地域プランニンググループ／絹原一寛

前号では京都のメインストリート、四条通の話題を扱いましたが、今号では大阪のメインストリート、御堂筋沿道でのまちづくりをご紹介します。

不動産オーナーによるネットワーク組織「御堂筋の会」の設立

昨今のミナミの御堂筋沿道は、ブランドショップの出現などテナントの構成も大きく変化しており、インバウンド観光の急伸で海外からの観光客の通行量が激増、外国人が大きな買い物袋を持って歩く姿が日常の光景になりました。今後、その数は倍増するとも見込まれ、現状の道路空間では対応しきれない事態も遠くない未来に訪れると思われま

す。こうした状況に対し、大阪市は「グランドデザイン・大阪」「大阪都市魅力創造戦略」で御堂筋を世界に誇る都市魅力を発揮できる舞台として、顔に相応しい賑わいのある空間へ再編を図る方向を打ち出し、平成26年10月に側道を閉鎖し歩道を拡げるとともに自転車通行空間を確保するという具体的な空間再編案を発表しました。

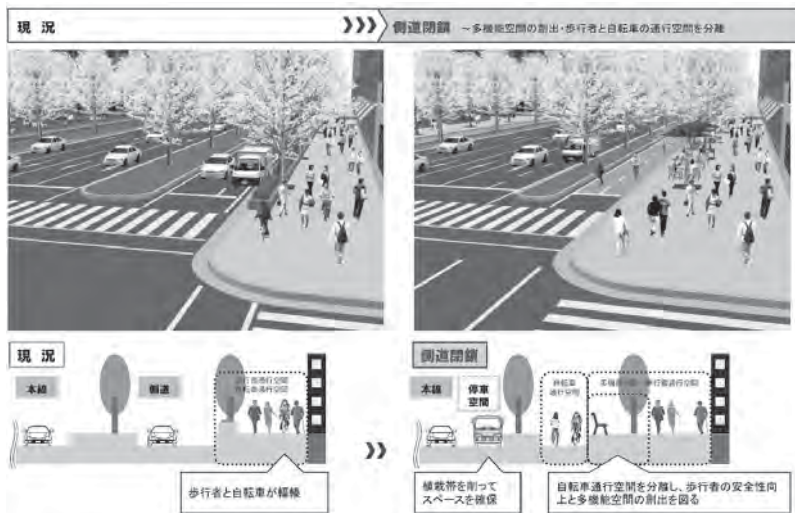
御堂筋沿道では淀屋橋～本町通間を活動範囲とした「御堂筋まちづくりネットワーク」や、長堀通付近で活動する「NPO法人御堂筋・長堀21世紀の会」があり、沿道の将来像の議論・提言や地道な美化活

動などを息長く実践しておられます。また、ミナミ全体のまちづくりの連携組織として「ミナミまち育てネットワーク」があり、多数の団体・企業が参加して各種イベント・プロモーションの実施や、提言活動などを展開しています。

しかし、ミナミの御堂筋沿道では、沿道のまちづくりの情報を地権者に届ける場もなく、せっかく各種事業が実施されていても「自分たちの知らないところで事業が進んでしまいかねない」という状況でした。

折しも、昨年度に御堂筋イルミネーションの難波西口交差点までの延伸が発表され、今後沿道での協力の可能性や、前述の空間再編への対応なども早急に考えていかねばならなくなり、これに危機感を持った不動産オーナーが発起し、情報交換を行う場（プラットフォーム）として「御堂筋の会」を立ち上げました。

「御堂筋の会」では、平成26年9月から毎月のご定例会を開催し、御堂筋関連の情報共有や、国内外のメインストリート事例の勉強、府市の担当部局との情報交換を行う、「沿道地権者に情報を届けるプラットフォーム」として機能しており、参加する地権者も増えつつあります（当方はこの事務局を支援しています）。



図：区間別整備イメージ：南側（新橋～難波西口間）
大阪市「御堂筋の道路空間再編について（案）」報道発表資料（平成26年10月）



図：会のパンフレット



写真：定例会の様子

一気に動き出した、千日前通以南のモデル区間整備

平成27年2月には、空間再編のモデル区間として千日前通からなんば駅前までの区間を平成27年度中に整備する方針が打ち出されました。

「御堂筋の会」としても、この整備がモデルとなって北に事業が伸びていくことから、官民協働のモデルケースとして、地権者と関係者、行政が対話しながら空間整備とその後の維持・管理、活用を考えるべく、町会・商店会と、関係団体（なんば安心安全にぎわいのまちづくり協議会、ミナミまち育てネットワーク）と協調し「千日前通以南モデル区間整備協議会」を設立しました。現在、大阪市と断続的に整備内容や、その後の維持管理について意見交換を行っています。

なんば駅前では「なんば安心安全にぎわいのまちづくり協議会」が中心となり駅前広場の歩行者空間化をめざした取り組みを進めています。ミナミが歩行者の空間として大きくその姿を変えようとする動きを、沿道地権者も注視しています。ま



写真：協議会の様子

さに千載一遇のチャンスです。京都の四条通や姫路の大手前通りで歩行者主体の空間再編が実現、一歩先を行かれている状況でもあり、この機を逃すことなく、スピード感を持って取り組んでいかねばなりません。

そして、歩行者空間ができた暁には、次の段階、官民協働のもと高質で賑わいのある空間を自律的・継続的に創っていく「エリアマネジメント」へとステップアップしていくことが期待されます。拡張された歩行者空間の維持・管理や、かねてより問題となっていた自転車の不法駐輪に対して、地元と行政が一層力をあわせて取り組んでいけるように、この協議会での議論とアクションが期待されるどころです。

さらには、沿道の関係主体が自ら資金等を拠出し、高質な維持・管理を担う段階まで到達できれば、「空間整備」だけではなく「マネジメント」のモデル整備区間として、また、既成市街地におけるエリアマネジメントのモデルとしても、大きな意味を持つと考えています。平成26年4月に施行された「大阪版BID条例（大阪市エリアマネジメント活動促進条例）」の制定も追い風となるでしょう。

ミナミ御堂筋のこれからに目が離せない

賑わいあふれるまちを生み出し世界から集客を図ろうとする中で、道路空間の再編を進めつつ、沿道の不動産オーナーが関係者とともに望ましいまちの実現に向けて働きかけ、官民協働でまちの資産価値を高めていく。これからの公共空間、そして世界に誇る御堂筋のあるべき姿に向けて、「御堂筋の会」は今後とも活動を続けていきます。

既成市街地でかつ区間によって地権者の構成も多様である難しさもありますが、そこを乗り越えた先に世界に誇る御堂筋の明るい未来があると信じています。御堂筋はこれからのまちづくりも目が離せません。ぜひ注視して頂ければと思います。

新・人 紹・介



アルパックとの出会いはごみ調査で／環境マネジメントグループ
伊藤栄俊

4月より大阪事務所の環境マネジメントグループに配属になりました伊藤栄俊です。

アルパックには、以前からごみ調査の現場のアルバイトに来ており、また、大阪事務所には昨年9月より内勤のアルバイトに来ておりましたので、以前からお世話になっておりました。

生き物が好きだったことがきっかけで、環境問題に興味を持ち、大学では生態学を学びました。と、言いつつも実際には、所属していたサイクリング部で自転車に乗ってばかり、そして、ごみ調査のアルバイトばかりしておりました。

ごみ調査の現場は、ごみに対する考え方や日々の行動も変えるほど衝撃的でした。なにより、生き物好きがきっかけの環境問題に対する興味も、ごみ調査との出会いで、廃棄物、資源循環、さらにはそこに投入されるエネルギーと、関心の幅は広がりました。大学で学んだ生態学を含め、様々な業務に臨んで行くことで、環境問題の解決策を模索していきたいです。

また、趣味が自転車なので、



上北山村のヒルクライムは選手として出場したいと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

新たな土地 京都にて／地域産業イノベーショングループ
片山麻衣

今年4月からアルパックに入社いたしました、片山麻衣です。京都事務所、地域産業イノベーショングループの所属となりました。

生まれも育ちも高知県で就職を機に、初めて親元を離れました。慣れない生活に戸惑うこともあります。早く新しい地に慣れ、様々なことに挑戦していきたいと思っています。

大学では、地域経済論を学ぶゼミに所属しておりました。北川村のユズ、高知県で栽培されているお茶「土佐茶」に焦点を当てながら、実際に関係各所にヒアリング調査を行い、地域の農産物が輸入産品からの影響をどう受けているのかなど、「地域に内在するグローバル化の問題」について調査をしてきました。この経験から、地域では高齢化、輸入産品の台頭など様々な問題はありますが、その問題に立ち向かおうとしている農家の方、輸入産品にも負けない魅力的な農産物があるということを知りました。今後は、そういった地域の魅力を国内外に伝えるとともに、少しでも多くの地域活性化に取り組んでいきたいと考えています。

趣味は、映画鑑賞、恐竜博物館に行くこと、付箋、ポストカード集めです。最近では、韓国ドラマが好きということもあり、韓国語の勉強を始めたいと思っ

ています。

知識も経験も少なく、まだまだ未熟者ですが、若さを武器にこれからどんどん吸収していきたいと思っていますので、どうぞよろしく願いいたします。



新しい領域で持続可能な地域のためにできることを／地域再生デザイングループ
戸田幸典

4月から大阪事務所、生活デザインチームに配属となりました戸田幸典です。

奈良県出身、立命館大学在学中から大学生協で学生常勤役員を経験し、卒業後は京都でNPOの中間支援組織、また地域の寄付を地域課題解決へとつなぐ日本初の市民コミュニティ財団を2009年に設立し、現場責任者として運営してきました。2億3千万円以上の寄付を地域課題解決のアクターにつなぎつつ、全国各地へのコミュニティ財団支援等にも従事してきました。家に帰れば、カメラと車と料理が好きな2人の子どもを持つ父です。

これまでも多様なセクター、業種の方々と連携協働しながら「資金」をつなぐことで持続可能な地域社会づくりに取り組んできました。そのような中、人口減少・課題先進国とも言われる日本に

において、持続可能な「住まい」や「コミュニティ」づくりに貢献できる仕事に別の立場で従事したいと考えるようになり、アルパックのメンバーに加えていただくことになりました。

これまでとは異なる領域での自らの足りない能力への気づき、大学時代から Mac で仕事も活動もしてきた僕にとって久しぶりの Windows 環境、1時間30分の通勤時間、もちろんこれからの業務。新しい場に身を置くことは日々自分を成長させてくれるなあと改めて感じています。

これまでの経験値とネットワークを生かしつつ、自分と会社と社会のためにがんばりますので、よろしくをお願いします。



よろしくお願ひ致します。／建築プランニング・デザイングループ 塗師木伸介

はじめまして。4月に入社致しました塗師木伸介です。

私は旅するのが好きで、三月の卒業旅行ではモロッコを2週間程訪れました。モロッコの都市では1000年以上前に出来た古都に今も人々の生活が息づいており、古くなって崩れてきた家を修理するなどまちを少しずつ直しながら住み続けている姿にとても感動しました。また、公

衆浴場では地元のおっちゃんと言葉がわからないながらも背中をこすりあったのはとても良い思い出です。

大学・大学院では建築を学びました。これからもこの仕事をしていく上で建築と関わっていくこととなりますが、ただ建物を建てるだけになってしまっただけにはいけないと思っています。建築をつくっていくプロセスの中で地域の方々や専門家の方など、多くの人と協力し、みんなで作ってあげていくようなものになりたいと考えています。そして、それに人の生活が息づき、長く大切にしてもらえよう努力していきたいと思っています。

これからアルパックにおいて新たな環境が始まるわけですが、今は右も左もわかりません。みなさんに教えて頂きながら、持ち前のフットワークの軽さを大切に、新たな風を巻き起こしたいと思っています。



取り組みたいこと／環境マネジメントグループ 樋口彩子

こんにちは。今年からアルパックに所属いたします、樋口彩子です。

私は奈良市出身で、大学は大阪に通っておりました。幼い頃から奈良の文化財に囲まれた環

境で育ち、歴史的なものに興味を持っており、それらを無理なく活用していくにはどうすれば良いのか、と考え始めたのが、まちづくりに興味を持ったきっかけです。

大学では建築環境工学の熱環境・空気環境の研究室に所属し、蓄熱システムやオフィスの知的生産性に関する研究を行っていました。都市計画という分野ではありませんが、研究室で学んだひとつひとつのことを深く掘り下げて考えるという姿勢はこれからの業務にも活かしていきたいと思っています。

その他大学ではバンド活動、留学生との交流活動などをしていました。また大学時代にアメリカ、ヨーロッパ等様々なところに滞在し、そこに住む人びとの生活に触れられたのは非常に貴重な体験でした。

まだ「まち」というスケールで捉えることに実感を持っていませんが、業務を通して感覚を身につけていきたいです。環境分野だけでなく、空間的なことや事業化する仕組みなど、様々な視点を学び、物事の新しい結びつけ方を考えてゆけたらと思っています。どうぞよろしくお願ひいたします。





下北山村写真集「きなりの郷の暮らしから」が発行されました

建築プランニング・デザイングループ／鮎子田稔理

前号で「下北春まな」をご紹介しましたが、奈良県下北山村は平成26年4月に、村政125周年をむかえ、その記念にふるさと写真集「きなりの郷の暮らしから」が発行されました。

下北山村を表す言葉「きなり」＝「生成り」とは純粹、素朴、まざりけのないと言う意味で「本物のある村づくりを」という願いを込めた言葉です。

平成27年3月時点での村の人口は1,028人。高齢化率は約45%。全国で市町村合併が進む中であえて自立の道を選び、現実を直視しながら村民が互いに支え合って生きていこうという姿勢に感動すら覚えます。

今回写真集をつくるにあたり、村民や村の民族資料館からお借りした写真は約3,000枚。そして



村の風景や人物など新たに撮影した写真は約1,500枚。計約4,500枚の写真データと村政要覧や村史を見比べながら、写真集の構成を考える日々が続きました。また、村長や職員の方から写真にまつわるお話を伺って、写真をピックアップし、さらに村民から写真についてのエピソードなどを聞くことができればと昨年11月の連休に行われた村の文化展の一面にふるさと写真集コーナーを設けさせていただきました。

文化展は毎年行われているもので、絵画や陶器など村民の作品が展示されていました。連休で且つお祭りも行われていることから帰省されたご家族も多かったようで、多くの方が訪れました。写真パネルを見入りながら昔話に花が咲く場面も見ることができ、写真に関するお話も聞くことができました。

下北山村には現在8つの集落があり、今回の写真集のために各集落の集合写真も撮影しました。できるだけ屋外で村の風景を背景にして撮影したいと思ったので、集合場所から少し移動していただいた集落もあり、高齢の方には負担もおかけしたかと思いますが良い写真を撮ることができました。

写真集はページごとに「まつり」「山のしごと」「学校」「ダム工事」といったように約30のテーマを設定しています。

いずれも下北山村の歴史や村民の生活から外せないテーマばかりです。

テーマの一つである池原ダムは、発電を目的としたアーチ式コンクリートダムでアーチ式としては国内最大の総貯水量と湛水面積を誇り最大35万キロワットの電力を生み出しています。ダム工事が行われた昭和30年代後半から昭和40年代にかけては工事で働く人が村の人口を増やし、娯楽の場も設けられました。その名残が全国でも珍しい村営ゴルフ場という形で残っており、村民のレクリエーションや健康づくりの場となっています。

できあがった写真集は各世帯や関係者へ配布されました。残部については販売はしませんが希望者には送料や事務費の実費で頒布される予定です。

村民や関係者の皆さまが村の歴史や文化や暮らし方を共有し、これからも共に歩む村の未来へつながる写真集であって欲しいと願っています。

発行：下北山村

編集：アルパック

デザイン：バードデザインハウス

撮影：スタジオ北山山荘



文化展で写真についての思い出を語る村民

暗闇の中の対話（ダイアログ・イン・ザ・ダーク）を体験してきました

地域再生デザイングループ
／大河内雅司

暗闇のエンターテイメント

「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」は世界 35 カ国、130 都市で開催されている“暗闇のエンターテイメント”です。参加者は完全に光を遮断した空間の中へグループを組んで入り、暗闇のエキスパートであるアテンド（視覚障害者）のサポートを受けてさまざまな体験をします。国内では東京と大阪に会場があり、東京会場は所要時間 90 分、大人 5,000 円の国際的なプログラム、大阪会場は所要時間 70 分、大人 3,500 円で、積水ハウスがコラボしたプログラムとなっています。グランフロント大阪の積水ハウス“住ムフムラボ”内に設けられた、大阪会場を体験レポートします。

暗闇では饒舌になる

参加者は東京会場がよかったので大阪会場にも来たという、リピーターの女性と私の二人です。女性のアテンドから説明を受けた後、三人で暗闇の世界に入っていきました。



直後は不安でいっぱいになりました。「目は口ほどにもの言う」は通用しない非日常の世界に放り込まれて、普段よりおしゃべりになって情報を得ることで安心しようとしたようです。後からアテンドに言われたのですが、初めは声がうわずっていたそうです。ネタバレになるので具体的な内容には触れませんが、体験を通じて気づかされたことをいくつか紹介します。

暗闇で呼び覚まされる感覚

視覚が使えないからこそ、会話をする、手や足の裏で探る、臭いを嗅ぐ、味わう事に必死になります。アテンドのサポートが上手なので、安心感の中で普段使っていない感覚を呼び覚ますことができます。非日常の暗闇空間を上手に使って、コミュニケーションの大切さに気づかされるプログラムが用意されています。慣れてくると、声を聞くだけでその人との距離や姿勢、その人の気持ちまで分かるような気がしました。

気づきを求めて暗闇をまた体験してみたくなる

暗闇のエキスパートであるアテンドから気づかされることも、数多くありました。お世話になった女性のアテンドは、ひとり暮らしで料理も自分でされており、「包丁で手を切ったり、やけどをしたりしませんか」と聞いたのですが、「見える人の方が意外と怪我をしやすい」と言われました。



我々は、見えることが当たり前になっていて、大切なものが見えていない、見ようとしていないのかもしれない。

このイベントは、大企業の人材研修や大学ゼミ、暗闇を活かした商品開発にも利用されており、貸切利用も可能になっています。リピーターが多いとのことで、エンターテイメントとしてよく練られていることが分かります。私も、次は東京会場の 90 分コースを体験したいなと思っています。「結構いい値段だけど、国際的なプログラムはどんな内容かな。どんな気づきがあるのかな」と期待しています。

<http://www.dialoginthedark.com/>

編集局から

今号に宛先確認はがきを同封させていただきます。住所変更、職場の異動等ございましたら、ご連絡ください。また、皆さんのご意見・ご感想もお待ちしております。

昭和町界隈でどっぶり昭和を満喫！

都市・地域プランニンググループ／中井翔太



4月29日(水)この日は、「昭和の日」ということで、大阪市阿倍野区昭和町駅の周辺で開催されるイベント「どっぶり、昭和町。」にいらしてきました。

駅を降ると、漂うおいしそうな香りで長屋が連担する路地(やっぱり長屋&レトロを満喫エリア)に引き込まれます。飲食の模擬店が並び、路地中央部の住宅では寄席が開催されおおいに賑わっていました。このエリアこそ本イベントの起源となった場所です。

当日、会場に貼られていた活動紹介によると、2006年、宮大工により復元された長屋が大阪都市景観大賞に選出され、さらに、長屋建築として初の登録文化財に指定されました。これをキッカケに昭和初期の景観を残す長屋で働く若者が、人情味溢れる長屋

のコミュニティを具現化したいとの思いで始めたのが「どっぶり、昭和町。」とされます。現在、このイベントも10回目の開催となり、商店街なども巻き込み多数の開催エリアを持つようになっています。また、当イベントとの明確な因果関係は分かりませんが、近年では、周辺の長屋をリノベーションした店舗等も出てきており、仮にこのイベントでエリアの認知が進んでいるとすれば、その波及効果は特筆すべきといえます。

以前、187号のまちかど「塀の中から見た風景」にて、かつての人間の行動(3億円事件)が一般的に評価されない景観(塀)に「深み」を与えているという事例をご紹介しましたが、今回はまさに、暮らしの積層である景

観を改めて評価することが人々の記憶を掘り起こし、更なる行動の積層を再び創り出した事例といえるのではないのでしょうか。

我々も景観づくりのお手伝いをさせて頂く機会がありますが、いわゆる「良好な景観」をつくることを最終目標にするのではなく、昭和町の長屋のまちなみの様に、あらたな人間の行動を創発する「引き金」となる景観づくりや評価の枠組みづくりを意識する必要性を再認識することになりました。

将来、「昭和な景観」がどのような意味を持っているのか、または意味自体を持ち得るのか…昭和の盛り場を勢いづけたという、コロナビールに酔いながら、そんなことを考えてみた休日でした。



「どっぶり、昭和町。」ガイド表紙

arpak アルパック(株)地域計画建築研究所

Architects Regional Planners & Associates · Kyoto

<http://www.arpak.co.jp> E-mail info@arpak.co.jp

ニュースレターはホームページからもご覧いただけます。



この用紙は「びわ湖の森を元気にする」
kikitoペーパーを使用しています。

本社

京都事務所 〒600-8007 京都市下京区四條通り高倉西入立売西町 82

TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764

大阪事務所 〒540-0001 大阪市中央区城見 1-4-70 住友生命 OBP ブラザビル 15F

TEL(06)6942-5732 FAX(06)6941-7478

名古屋事務所 〒460-0003 名古屋市中区錦 1-19-24 名古屋第一ビル 6F

TEL(052)202-1411 FAX(052)220-3760

東京事務所 〒102-0074 東京都千代田区九段南 3-5-11 スクエア九段ビル 1F

TEL(03)3288-0240 FAX(03)3288-0221

九州事務所 (株)よかネット 〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町 3-8 福岡パールビル 8F

TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128